

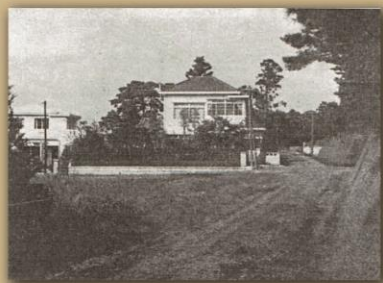
# 写真が伝える「荻窪の記憶」

中央線を代表する住宅地の一つ荻窪。

その昔は、江戸に野菜や薪炭を供給する武蔵野の農村でした。

近代の訪れを告げたのは、明治22（1889）年の甲武鉄道（のちの中央線）の開通と、同24年の荻窪駅の開設でした。

明治末になると、東京の市街に近いにもかかわらず、空気の澄んだ荻窪は、別荘の適地として注目されます。宅地化が進んだのは、関東大震災後のことです。



区画整理によって生まれた  
荻外荘下の住宅地

大正14（1925）年から約10年をかけて行われた、荻窪を含む旧井荻村の土地区画整理事業によって道路が整備されると、宅地化に拍車がかかりました。

映像は「消すことのできない記憶」と言った詩人がいます。

ささやかな展示ですが、

郊外住宅地として発展してきた

「荻窪の記憶」の一端に触れていただければ、幸いです。

2020年3月

杉並区都市整備部市街地整備課荻窪まちづくり担当

（上記案内文と写真の解説は、荻窪地域区民センター協議会 OB 松井和男氏 によるものです。）

# ①武蔵野の農村



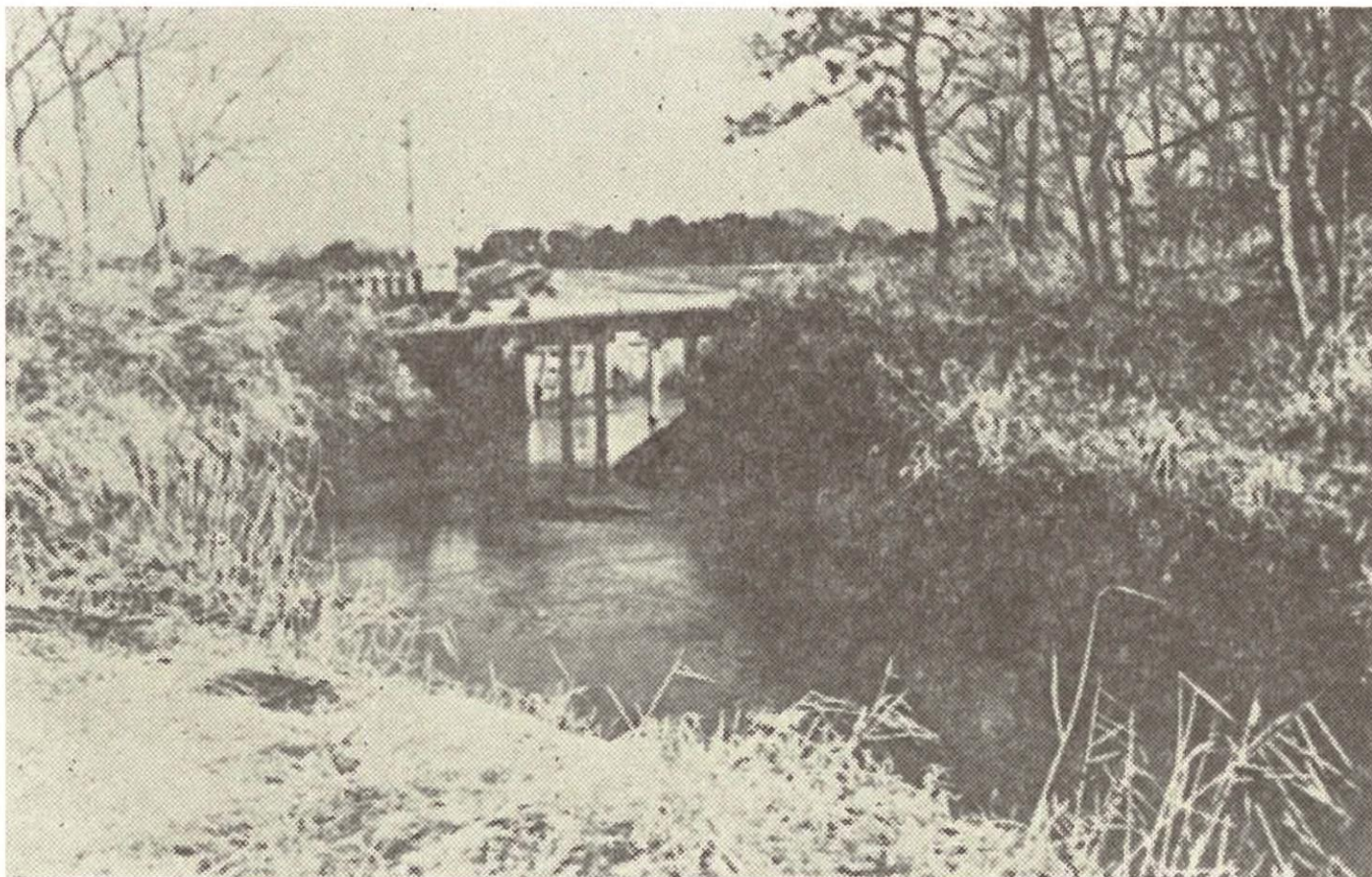
クヌギ並木 昭和初年（1927頃）

出典『杉並風土記上巻』（森泰樹著、杉並郷土史会発行）

ケヤキの並木とともに、武蔵野を象徴する風景だった。

※展示にあたっては、杉並郷土史会のご了解を得ています。

## ②善福寺川



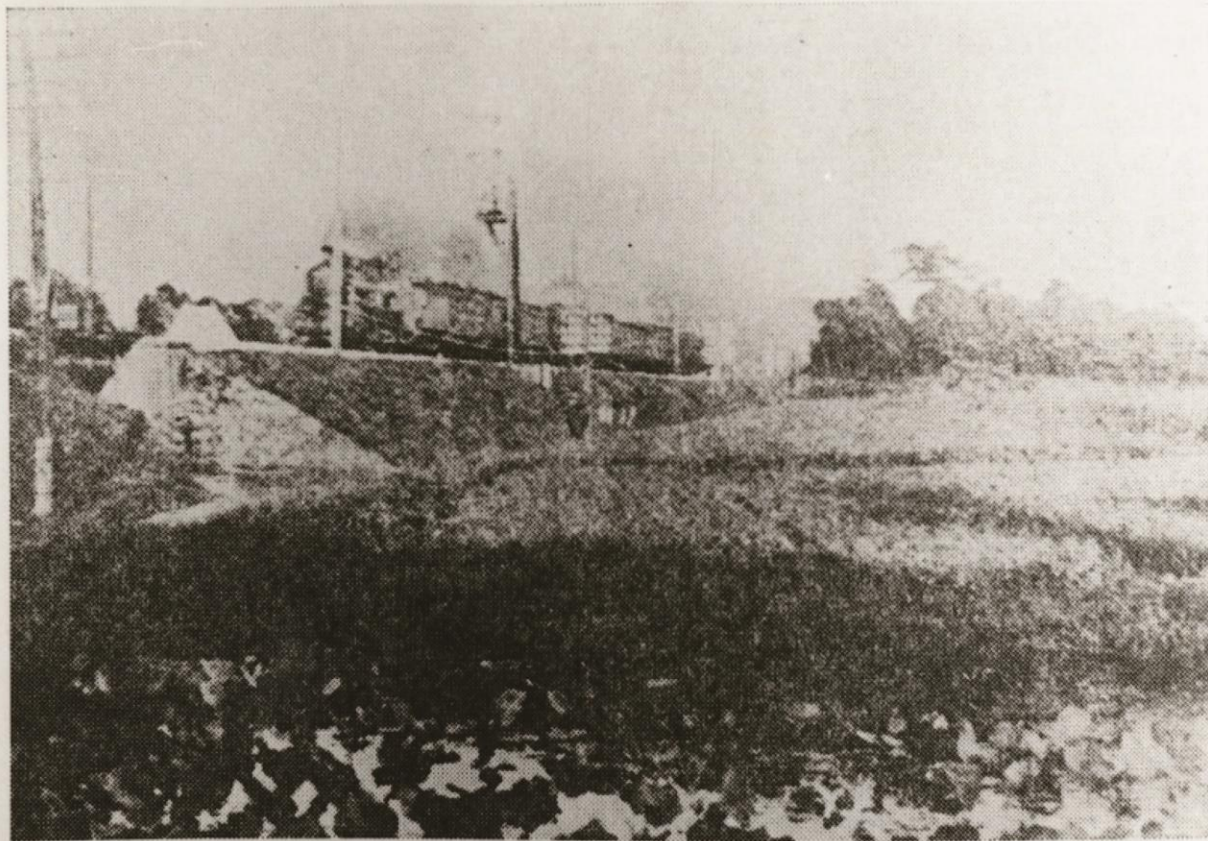
善福寺川 両岸は雑木林 昭和初年（1927頃）

出典『杉並風土記上巻』（森泰樹著、杉並郷土史会発行）

ハヤ、フナ、コイ、ナマズ、ドジョウ、ウナギなど、たくさんの魚が棲み、夏はホタルが飛び交った。

※展示にあたっては、杉並郷土史会のご了解を得ています。

### ③鉄道



昔の中央線、ガードのところは善福寺川（宇田川太一氏蔵）

杉並区提供

大正 14 年（1925）頃

農村時代の 大正 3 年（1914）、荻窪駅の乗車客数は 1 日平均 197 人。しかし、宅地化が進み、中央線が通勤の足になった昭和 4 年（1929）には 6000 人を超えた。ちなみに、平成 30 年度の乗降客数は 1 日平均約 27 万人。

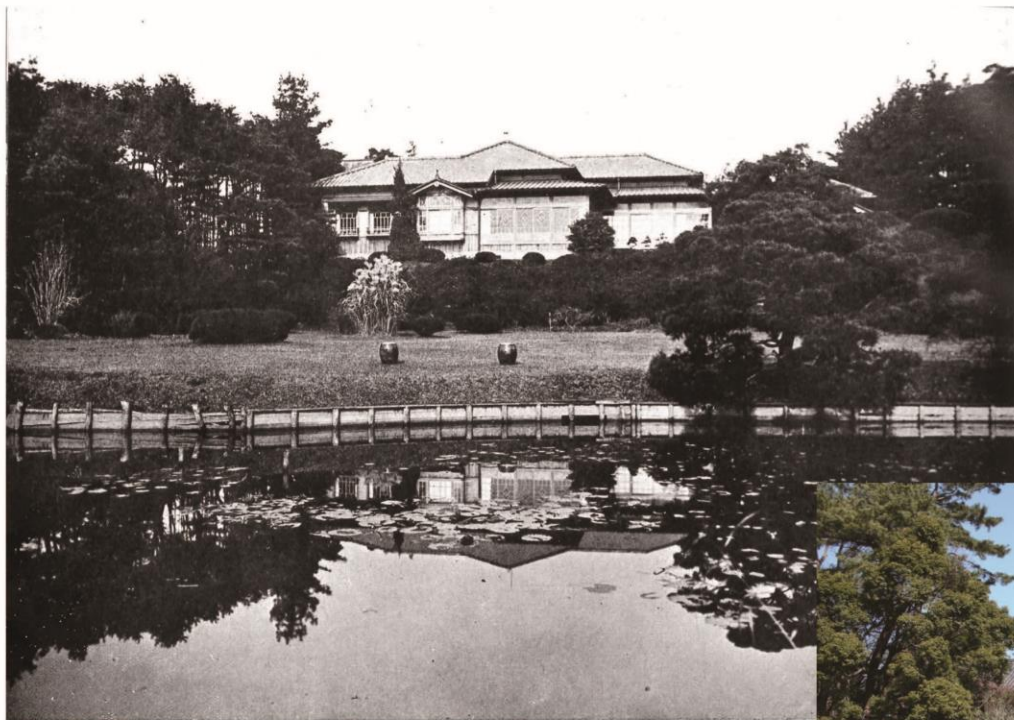


昭和前期の神明町（現在の南荻窪3丁目） 昭和9年（1934）

光森一誠氏 提供

新しく建った住宅のまわりは一面の大根畑で、近くに沢庵工場もあった。左奥に小さく見える鳥居は天祖神社。

## ⑤ 荻外荘



個人提供



現在の荻外荘 杉並区みどり公園課提供

### てきがいそう 創建時の荻外荘 昭和初期

施主は大正天皇の侍医頭を務めた入澤達吉。設計者は築地本願寺などの作品で知られる伊東忠太。昭和12年（1937）、当時首相を務めていた近衛文麿に譲渡された。平成28年（2016）、国の史跡に指定。